第59回　熊本県保育研究大会　玉名大会　　参加者72名

【第4分科会】テーマ：保育の中の食育

　保育所における健康や安全の確保は保育所におけるすべての子どもの発達基盤となる重要なものである。働き方や生活の多様化がすすむなかで、保育所が子どもの健康・安全に果たす役割は大きくなっている。同様に、食生活の変化、外食産業の拡大は子どもの食に大きな変化をもたらしており、保育所等における食育の役割は大きくなっている。本分科会では、食育及び健康・安全に関する実践・研究を通して協議を行う。

座長：緒方　裕之（須恵保育園）

助言者：弥頭　幾久雄（西合志中央保育園）、瀬口　政子（泉田保育園）

意見発表者：上村　真紀子、田村　悠里（大道保育園）、岩下　通江（高森東保育園）

幹事：松本　紀美枝（おおくらの森保育園）

記録：柴尾　美保（おおくらの森保育園）、坂本　絵里香（梅林保育園）

　３．グループ討議

　協議の柱

（１）離乳食期の子どもへの（きめ細やかな）配慮のありかた。

（２）園は地域とのつながりをどう深めていくか。

　討議のまとめ

・家庭との連携　＋　保育士と給食の連携

・アレルギー対応・個別対応

　・地域・小中高校との連携

１．発表者　　上村　真紀子、田村　悠里

テーマ：「心を添える」

＜考察＞

　食べる意欲は生きる意欲につながるとも言われるように、意欲的に食べる子どもたちを育てることは大切なことである。発熱や下痢・嘔吐などで長期間欠席したり、花粉症やアレルギーなどで肌がカサカサになったりする子どもたちが少なからずいる現状からの取り組みとして、廃棄している野菜の皮やヘタ等に免疫力を高めるファイトケミカルがたくさん含まれており、それを煮出して出汁として使う「べジブロススープ」。また、「手づかみ食べ」の重要性を認識し、味や盛り付け、食具などの工夫、保育の中で指先や手首を使う遊びの環境作り。このように栄養士、保育士が連携、協力しながら、目の前の子どもの姿を見て、子どもたちが意欲的に「さわってみたい」「たべてみたい」と思ってくれるよう探求心を持って取り組んでいく。その取り組みが、意欲的に食べる子どもたちを育てることにつながっていくのではないかと感じた。

＜助言内容＞

　食育に取り組むにあたり保育室と給食室が連携し、子どもたちのために何ができるか職員一丸となって取り組むことが大切であるが、それとともに保護者の関心の重要性、保護者との関わりにどう取り組んでいくかが考えられる。地域支援活動の取り組みや月一回、試食会を行う中で、子育てや離乳食などの悩みに力を添えている。地域の子育て支援の拠点としての保育園、そして保育士、栄養士としての役割を認識し、保護者支援の手立ての一つとして食の情報発信を探っていきたい。

４．まとめ・その他

　人の「食を営む力」の源となる離乳食に焦点を当て、心も身体も暖かくなる給食を提供。食材の味を活したり、べジブロススープ、手づかみ食べ、個々に合った離乳食の取り組みを行っている。食物ロスをなくすためにも、食の大切さを保護者へ発信していく必要がある。また、職種関係なく連携することが重要である。

　小規模な園ではできないではなく、小規模な園だからこそできることを実践している。地域・小中高校との連携によってできる「食育」から、保育園でできる「食育」の取り組みに繋げている。野菜の栽培から収穫して食べる一連の流れを体験する事で「感謝」の気持ちが芽生えた。

　自分の日頃の保育・関わりなどを振り返り、見つめ直すことができた。

２．発表者　岩下　通江

　　テーマ「食べる事は生きること」

　～保・小連携活動を通しての食育～

　＜考察＞

　「食育」とは生きるために必要であり、様々な命を頂く事で自分たちが生きていけるという事に感謝をする心を育む事だと考える。その中で、保育士に出来ることは何かと考え、野菜作りを通して自分で作る楽しさや、野菜が生長していく喜びを感じる気持ち、そして、収穫して食するという体験が出来る環境を作り、地域・小学校・中学校との連携活動を行い「食育」に繋げている。

＜助言内容＞

　少ない人数の園でも地域全体で食育の推進に取り組んでいる事を「保育の中の食育」という観点から封筒シアターの実践を紹介してもらった。保育士ならではの声のトーンや話し方で見えている者が引きつけられるものだった。